

ヨブ記4-7章「味気のない言葉」

1A 年長者の叱責 4-5

1B 罪のゆえの苦しみ 4

1C 正気への喚起 1-6

2C 原因あつての結果 7-11

3C 肉体の滅び 12-21

2B 愚か者への懲らしめ 5

1C 愚か者の滅び 1-7

2C 神の前のへりくだり 8-16

3C 叱責の後の回復 17-27

2A 期待ゆえの失望 6-7

1B 友からの同情 6

1C 耐え難い苦悶 1-7

2C 待つことへの無力感 8-13

3C 裏切られた友情 14-23

4C 無実への訴え 24-30

2B 希望なき生活 7

1C 虚しい日々 1-6

2C 生きることへの絶望 7-10

3C 見張られた人生 11-21

アウトライン

ヨブ記4章を開いてください。私たちは前回、友人たちがヨブのことを聞きつけて、見舞いにきたところを読みました。ヨブのそばに七日間、一言も話さずに彼のそばにいました。ヨブは正しく潔癖で、神を畏れ、悪から遠ざかっていた人でした。けれども、そばにいた友人三人に、自分の苦難と苦痛を吐露し始めました。その言葉があまりにも激しいものでした。彼は自分の生まれてきた日を呪ったのです。そこで友人たちは、黙っていることができなくなりました。初めに口火を切ったのは、年長者のエリファズです。

1A 年長者の叱責 4-5

1B 罪のゆえの苦しみ 4

1C 正気への喚起 1-6

4:1 すると、teman人エリファズが話しかけて言った。4:2 もし、だれかがあなたにあえて語りかけたら、あなたはそれに耐えられようか。しかし、だれが黙っておられよう。

エリファズは、ヨブのことを非常に気にしました。語りかけたら、押しつぶされてしまうかもしれない。けれども、死にたいという言葉まで口にしています。ここで、どうしても何か言わなければ、立ち直れなくなってしまうのではないかと気がかりになったのです。これは現実ではないでしょうか、人が「死にたい」という言葉を発したら、いてもたってもいられなくなります。何とかして立ち直るための言葉を心の中で探るでしょう。

4:3 見よ。あなたは多くの人を訓戒し、弱った手を力づけた。4:4 あなたのことはつまずく者を起こし、くずおれるひざをしっかりと立たせた。4:5 だが、今これがあなたにふりかかると、あなたは、これに耐えられない。これがあなたを打つと、あなたはおびえている。4:6 あなたが神を恐れていることはあなたの確信ではないか。あなたの望みはあなたの潔白な行ないではないか。

エリファズにとって、ヨブは非常に尊敬する友人でした。これだけの良い行ないを他者に対して行っていた手本でありました。ところが今、彼から出る言葉がまるで別人のようになってしまった。「これでは、潔癖と正しさを誇っていたあなたではないぞ。」と叱咤激励しているのです。しかし、それが励ましになっていないことは確かです。自分の期待する人でなくなった時、その弱さを持っていることを知った時、そうした側面も含めて受け入れ、友人として敬うことが真実な友情でありましょう。エリファズのしたことは、励ましているつもりが、実は押しつけになっていました。

2C 原因あつての結果 7-11

4:7 さあ思い出せ。だれか罪がないのに滅びた者があるか。どこに正しい人で絶たれた者があるか。4:8 私の見るところでは、不幸を耕し、害毒を蒔く者が、それを刈り取るのだ。4:9 彼らは神のいぶきによって滅び、その怒りの息によって消えうせる。4:10 獅子のほえる声、たける獅子の声は共にやみ、若い獅子のきばも砕かれる。4:11 雄獅子は獲物がなくて滅び、雌獅子の子らは散らされる。

ここから、ヨブの苦しみに対して三人の友人が立っている神学を見ることができます。それは、「苦しみは罪から来る」という神学です。エリファズは、神の知識に加えて、これまでの人生の道理として、長く生きてきた中で見てきた経験としても話しています。確かに聖書は、罪ゆえの苦しみを確かに教えています。アダムが罪を犯して、死が世界の中に入りました。そして地は呪われたものとなりました。被造物はそれゆえに、呻いています。そしてガラテヤ書 6 章 7 節はこう教えています。「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。」ですから、「苦しみは罪から来る」というのは、真理の一部であります。

しかし、そうっていないことが世界の現実です。確かに全ての人が正しいのではないですが、それでも重罪人であれば受けてふさわしい仕打ちが、なぜか良心的に生きている人々の上に襲うのです。ここが、私たちに苦しみを与えるところです。その苦しみとは、肉体が苦しいということ以

上に、なぜそれを受けているのか原因が分からないという苦しみです。「実存的苦しみ」と言ったらよいでしょうか。なぜ苦しんでいるのか分からないのが、人間には耐え難いのです。

したがって人間は、原因が分からない所で生きていくことを根源的に嫌います。そこで原因を作り出していきます。すべての宗教、すべての学問や哲学が、この呻きと叫びが原動力となっているといっても過言ではないでしょう。しかし、それは人間の測り知れない領域のことですから、どこかで空回りするか、表面的になるのです。同じように、エリファズはその原因をヨブが何か罪を犯したに違いないとしたのですが、それは的を射てなかったのです。

キリスト教だけが、その根源的部分を教えています。それは簡単に言えば、「神は神、人は人」ということです。神の主権であります。神と人は違います。神はご自分のかたちに人を造られました。人は神ではありませんでした。その境界線は、善悪の知識の木でありました。人は神に抛り頼むということにおいてのみ、その知恵を働かせることができます。ですから、神と共にいるということが、理解できぬ苦しみに対する答えになります。

3C 肉体の滅び 12-21

4:12 一つのことばが私に忍び寄り、そのささやきが私の耳を捕えた。4:13 夜の幻で思い乱れ、深い眠りが人々を襲うとき、4:14 恐れとおののきが私にふりかかり、私の骨々は、わなないた。4:15 そのとき、一つの霊が私の顔の上を通り過ぎ、私の身の毛がよだった。4:16 それは立ち止まったが、私はその顔だちを見分けることができなかつた。しかし、その姿は、私の目の前にあつた。静寂…、そして私は一つの声聞いた。4:17 人は神の前に正しくありえようか。人はその造り主の前にきよくありえようか。4:18 見よ。神はご自分のしもべさえ信頼せず、その御使いたちにさえ誤りを認められる。4:19 まして、ちりの中に土台を据える泥の家に住む者はなおさらのことである。彼らはしみのようにたやすく押しつぶされ、4:20 彼らは朝から夕方までに打ち砕かれ、永遠に滅ぼされて、だれも顧みない。4:21 彼らの幕屋の綱も彼らのうちから取り去られないであろうか。彼らは知恵がないために死ぬ。

エリファズは、自分がかつて受けた神秘的な体験を話します。恐怖体験でもありました。このことが強烈に自分の心の中に残っていて、そこで悟り得たことは、「人は神の前に正しい。その造り主の前に人は清くない。」ということでありました。これは、エリファズにとって自分の支えになっていて、それをヨブに語りかけたのです。そして、その確信にしたがってヨブに対して、肉体のある者は滅びるという論を展開させていくのです。

ここでのエリファズの過ちは、私たちもしばしば陥る過ちです。それは、「自分に与えられた確信を他の人に押し付ける。」という過ちです。自分の経験や体験は、それは主が与えてくださった貴いものであります。それは、神が示してくださったすばらしい真理です。しかし、そのすばらしさのゆえに私たちは、あなたもそうでなければいけないという押しつけを行ってしまいます。

2B 愚か者への懲らしめ 5

1C 愚か者の滅び 1-7

5:1 さあ、呼んでみよ。だれかあなたに答える者があるか。聖者のうちのだれにあなたは向かって行こうとするのか。5:2 憤りは愚か者を殺し、ねたみはあさはかな者を死なせる。5:3 私は愚か者が根を張るのを見た。しかし、その住みかは、たちまち腐った。5:4 その子たちは危険にさらされ、門で押しつぶされても、彼らを救い出す者もない。5:5 彼の刈り入れる物は飢えた人が食べ、いばらの中からさえこれを奪う。渴いた者が彼らの富をあえぎ求める。5:6 なぜなら、不幸はちりから出て来ず、苦しみは土から芽を出さないからだ。5:7 人は生まれると苦しみに会う。火花が上に飛ぶように。

全能者による啓示という強い後ろ盾を使って、エリファズはヨブに畳みかけるように問いかけます。「あなたが齒向かって、全能者に対して抗うことはできない。抗おうとするものは愚か者であり、ただ苦しみ、滅びるだけである。」ということでもあります。そこでエリファズは、ヨブに対してへりくだりを強く勧めます。

2C 神の前のへりくだり 8-16

5:8 私なら、神に尋ね、私のことを神に訴えよう。5:9 神は大いなる事をなして測り知れず、その奇しみわざは数えきれない。5:10 神は地の上に雨を降らし、野の面に水を送る。5:11 神は低い者を高く上げ、悲しむ者を引き上げて救う。5:12 神は悪賢い者のたくらみを打ちこわす。それで彼らの手は、何の効果ももたらさない。5:13 神は知恵のある者を彼ら自身の悪知恵を使って捕える。彼らのずるいはかりごととはくつがえされる。5:14 彼らは昼間にやみに会い、真昼に、夜のようになり手さぐりする。5:15 神は貧しい者を剣から、彼らの口から、強い者の手から救われる。5:16 こうして寄るべのない者は望みを持ち、不正はその口をつぐむ。

エリファズは、神が天気を動かす方、創造主であることを紹介し、そして正義の神であることを紹介しています。これだけの知恵と力を創造の働きで示された方が、悪者の企みは打ち壊される・けれども、貧しい者であれば救われると話しました。貧しい者とは、物理的な貧しさというよりも、へりくだる者、心の貧しいことを示しています。

3C 叱責の後の回復 17-27

5:17 ああ、幸いなことよ。神に責められるその人は。だから全能者の懲らしめをないがしろにしてはならない。5:18 神は傷つけるが、それを包み、打ち砕くが、その手でいやしてくださいから。5:19 神は六つの苦しみから、あなたを救い出し、七つ目のわざわいはあなたに触れない。5:20 ききんのときには死からあなたを救い、戦いのときにも剣の力からあなたを救う。5:21 舌でむち打たれるときも、あなたは隠され、破壊の来るときにも、あなたはそれを恐れぬ。5:22 あなたは破壊とききんとをあざ笑い、地の獣をも恐れぬ。5:23 野の石とあなたは契りを結び、野の獣はあなたと和らぐからだ。5:24 あなたは自分の天幕が安全であることを知り、あなたの牧場を見回っ

でも何も失っていない。5:25 あなたは自分の子孫が多くなり、あなたのすえが地の草のようになるのを知ろう。5:26 あなたは長寿を全うして墓にはいろ。あたかも麦束がその時期に収められるように。5:27 さあ、私たちが調べ上げたことはこのとおりだ。これを聞き、あなた自身でこれを知れ。

エリファズは、最後に主の懲らしめを受ければ、主が豊かに回復して下さるといふ、彼なりの励ましで自分の話を終えています。あなたが罪を犯したために、このような苦しみにあっている。歯向かって滅びるようなことがあってはならない。神は全能の方だから、歯向かってはいけない。今の状況を主に申し上げ、豊かに赦していただき、そして回復していただくというものです。

いかがでしょうか、彼の神学はまんざら間違っていない。彼は、ヨブがあまりにも激しい言葉を発したので、自分の実存によってヨブに必死に語りかけたのです。その内容は正しいのです。しかし、そこに大きな間違いがありました。正しいというのは、実は正しくないのです。「これは神の言われていることなのだから、正しいのだ。あなたは、この正しさを受け入れなければいけない。」とすることは、実は正しくないのです。このように押し付けることによって、内容は正しくても神の義ではなく、自分の義へと摩り替ります。神が状況を支配するのではなく、自分が支配してしまうからです。そして、自分が把握していると思っている状況も、実際は違っているのです。

ある注解には、「エリファズが神の代弁者になろうとした」とありました。その通りであります。もちろん、正義を語ることは大切です。そして弱った人を助け、知恵をもって訓戒し、気ままなものを戒めるという働きは大切です。主にあって、御霊によって、互いに行っていく必要があります。しかし、自分は弱さを身にまとっている人間であり、実はその弱さこそ用いてほしいと神は願っておられるのです。そうでなければ、神はイエスを人間の肉体をもってこの世に遣わされなかったのです。ですから、先ほどの「神は神、人は人」に戻るのです。人なのだから人に徹するのです。肉体の弱さがあるのだから、共に泣き、共に悩み、そして執り成して祈るのです。

2A 期待ゆえの失望 6-7

エリファズの言葉に対するヨブの返答が、6章と7章にあります。

1B 友からの同情 6

1C 耐え難い苦悶 1-7

6:1 ヨブは答えて言った。6:2 ああ、私の苦悶の重さが量られ、私の災害も共にはかりにかけられたら。6:3 それは、きっと海の砂よりも重かろう。だから、私のことばが激しかったのだ。6:4 全能者の矢が私に刺さり、私のたましいがその毒を飲み、神の脅かしが私に備えられている。

ヨブはここで、天秤にかけています。ヨブはもちろん、神の前で自分が完璧な存在であると思っ
ていません。しかし、自分が行なった罪によって今、受けている苦しみがあるのなら、それは海の砂

のように重いものであり、あまりにも不釣合いだということです。エリファズは、神の懲らしめをないがしろにするな、と言いましたが、これは懲らしめなんかじゃない、それ以上の仕打ちだ。これは、毒矢であり、神からの脅かしだと言っています。

6:5 野ろばは若草の上で鳴くだろうか。牛は飼葉の上でうなるだろうか。6:6 味の無い物は塩がなくて食べられようか。卵のしろみに味があろうか。6:7 私はそんなものに触れるまい。それは私には腐った食物のようだ。

ここでヨブは、まず自分の激しい言葉の理由を述べています。若草の上の野ろば、飼葉の上の牛は、鳴いたり唸ったりしません。つまり、激しい言葉を使っているのは、草や飼葉がない状態、つまり思い当たるふしがないのに苦しみを受けているという状態があるからだ、ということです。そして、味の無い塩、卵の白身の比喩であります。これはエリファズという言葉であります。自分の今の状態にじっくりと来る、一言ではなかったのです。空回りしている、表面的な言葉でしかなかったのです。そのことに対する落胆の思いをヨブはここで言い表しています。パウロがコロサイ人への手紙で、「あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味のきいたものであるようにしなさい。そうすれば、ひとりひとりに対する答え方がわかります。(コロサイ 4:6)」とあります。

2C 待つことへの無力感 8-13

6:8 ああ、私の願いがかなえられ、私の望むものを神が与えてくださるとよいのに。6:9 私を碎き、御手を伸ばして私を絶つことが神のおぼしめしであるなら、6:10 私はなおも、それに慰めを得、容赦ない苦痛の中でも、こおどりに喜ぼう。私は聖なる方のことばを拒んだことがないからだ。

ヨブがここで何を言っているかと言いますと、神の御心を知るならば自分が死ぬことも厭わないということです。死ぬについて、もしその神の目的を知ることができれば、苦痛であっても喜ぶことができるのです。問題は、先ほど話しましたように、その目的が見えないということです。今、受けている痛みが意味もなく与えられているように感じているのです。意味もなく苦しんでいること、何の目的で苦しんでいるのか分からないこと、これこそが最大の苦しみであります。

6:11 私にどんな力があるからといって、私は待たなければならないのか。私にどんな終わりがあるからといって、私は耐え忍ばなければならないのか。6:12 私の力は石の力であろうか。私の肉は青銅であろうか。6:13 私のうちには、何の助けもないではないか。すぐれた知性も私から追い散らされているではないか。

無目的に自分は死を待っているような状態である、ということです。そして、自分はこんなにも弱くなっているのに、なぜ生き延びているのかという疑問です。希望があるからこそ忍耐できるのであって、それがなければ今の苦しみに耐える力が出てこないではないかということです。

3C 裏切られた友情 14-23

6:14 落胆している者には、その友から友情を。さもないと、彼は全能者への恐れを捨てるだろう。
6:15 私の兄弟たちは川のように裏切った。流れている川筋の流れのように。6:16 氷で黒ずみ、雪がその上を隠している。6:17 炎天のころになると、それはなくなり、暑くなると、その所から消える。6:18 隊商はその道を変え、荒地に行って、滅びる。6:19 テマの隊商はこれを目当てとし、シェバの旅人はこれに期待をかける。6:20 彼らはこれにたよったために恥を見、そこまで来て、はずかしめを受ける。

午前中に学びましたように、ヨブは今、友人への深い失望の念をここに言い表しています。落胆しているのであるから、友情を取り去らないでほしい。このような時にこそ慰めが必要なのに、その友情を控えてしまうなら、全能者への恐れを捨ててしまうではないか？という懼れです。

そして肝心な時に助けなくなり、倒れてしまうということを、荒野に流れている川に例えています。冬は夜寒くなりますから氷が張ります。そしてもちろん炎天になると氷解するのですが、それだけでは終わらず乾燥してしまうのです。そして、隊商がこれを目当てに来たのになかったのも、そこで恥を受けることになる、とあります。まさにヨブがこのことを感じており、友であるからこそ抱いていた期待が、その期待が強い分だけ彼らは友情をヨブから引き離したのです。

6:21 今、あなたがたは、そのようになった。あなたがたは恐ろしいことを見ておびえる。

ここでヨブは、三人の本音を代弁しています。「恐ろしいことを見ておびえ」ているのです。ヨブの身に起こったことが尋常ではないので、そこに対する回答が見出されないで、恐れているのです。エリファズが与えた言葉というのは、先に話したように、塩気のない食べ物のようなもので、表面をかすめている程度のものでした。

6:22 私が言ったことがあるか。「私に与えよ。」とか、「あなたがたの持ち物の中から、私のために贈り物をせよ。」と。6:23 あるいは「敵の手から私を救い出せ。横暴な者の手から私を贖え。」と。

ヨブが求めているのは、財産でもなく、敵からの救いでもなく、友人からの「言葉」でありました。

4C 無実への訴え 24-30

6:24 私に教えよ。そうすれば、私は黙ろう。私がどんなあやまちを犯したか、私に悟らせよ。6:25 まっすぐなことばはなんと痛いことか。あなたがたは何を責めたてているのか。6:26 あなたがたはことばで私を責めるつもりか。絶望した者のことばは風のようなだ。6:27 あなたがたはみなしごをくじ引きにし、自分の友さえ売りに出す。

ヨブは、「まっすぐなことば」すなわち、彼の魂に触れる言葉が欲しいと願っていました。それは

「まっすぐなことば」であり、それは痛みを伴いますが、それさえあれば癒しも与えられます。しかし、彼らはやたらに責め立てているだけです。そして、「絶望した者のことばは風のように」と責めているだけで、まっすぐな言葉が何一つないのです。

6:28 今、思い切って私のほうを向いてくれ。あなたがたの顔に向かって、私は決してまやかしを言わない。6:29 どうか、思い直してくれ。不正があってはならない。もう一度、思い返してくれ。私の正しい訴えを。6:30 私の舌に不正があるだろうか。私の口はわざわいをわきまえないだろうか。

今、ヨブの顔は皮膚病によって原型をとどめていないことでしょう。だから、友人たちもヨブをしかと見ることをさえてきていません。しかし、しっかり見てくれよ、と頼んでいます。しっかり見ることができないのは、しっかりと彼の現状を把握していないことの表れでもあります。

このように、彼は友人に対しての失望をはっきりと言いました。しかし午前礼拝で話したように、私たちは良き友に自分の弱さも打ち明けて、それを分かってもらおうということも大事ですが、究極の慰めを与える方は神ご自身であり、キリストご自身であります。エリファズの言葉は、人間の誠実さの限界を表していました。そしてヨブの言葉は、慰めを友人に頼ることの限界を表しています。やはり最後の章における、神ご自身がヨブに対して友人三人と合わせるその和解をもって、その欠けたところが補われるのです。

2B 希望なき生活 7

そしてヨブは、独白を始めます。

1C 虚しい日々 1-6

7:1 地上の人には苦役があるではないか。その日々は日雇人の日々ではないか。7:2 日陰をあえぎ求める奴隷のように、賃金を待ち望む日雇人のように、7:3 私にはむなしい月々が割り当てられ、苦しみの夜が定められている。

その日暮らしの労働について語っているのは、「目標なき労役」を表しています。何のために労しているのか、それが分からないのです。私たち人間は、何のために今していることをしているのか、その意味を知っていないとやっていけない生き物です。これが動物と異なり、たとえ他に生きるための条件が揃っていても、なぜ生きるのかという意味を見失ってしまうと、生きる力を失ってしまいます。ある人がこんなことを言いましたが、真実でしょう。「人間は食べ物なしで四十日間生きられる。水なしで四日間生きられます。空気なしで四分間生きられる。しかし、希望なしで四秒間も生きられない。」Human beings can live for forty days without food, four days without water, and four minutes without air. But we cannot live for four seconds without hope.」希望はそれだけ、人を生かすのに必要なのです。

7:4 横たわるとき、私は言う。「私はいつ起きられるだろうか。」と。夜は長く、私は暁まで寝返りをうち続ける。7:5 私の肉はうじと土くれをまとい、私の皮は固まっては、またくずれる。7:6 私の日々は機の杼よりも速く、望みもなく過ぎ去る。

ヨブの苦痛は、安心して睡眠ができないということでした。どんなに一日の労苦が辛くても、寝ること、安息できることがあるからこそその労苦に耐えられます。しかし、病床に伏している人は、その体の痛みで寝ることさえままなりません。それで、寝ていても眠っておらず、いつ起きられるのかと悶々とするのです。

2C 生きることへの絶望 7-10

そして次にヨブは、主に対して自分の思いを打ち明けていきます。

7:7 思い出してください。私のいのちはただの息であることを。私の目は再び幸いを見ないでしょう。7:8 私を見る者の目は、私を認めることができないでしょう。あなたの目が私に向けられても、私はもういません。7:9 雲が消え去ってしまうように、よみに下る者は、もう上って来ないでしょう。7:10 彼はもう自分の家に帰らず、彼の家も、もう彼を認めないでしょう。

ヨブは、生きることへの意欲がなくなっています。ただの息だ、再び幸いを見ない。雲が消え去っていくようだ、自分の家には帰られないと言っています。旧約の聖徒たちには、復活の希望が新約のように啓示されている部分は少ないです。ここにあるように、人が死んだら陰府に生き、戻ってこないという意識でありました。

3C 見張られた人生 11-21

7:11 それゆえ、私も自分の口を制することをせず、私の霊の苦しみの中から語り、私のたましいの苦悩の中から嘆きます。7:12 私は海でしょうか、海の巨獣でしょうか、あなたが私の上に見張りを置かれるとは。7:13 「私のふしどが私を慰め、私の寝床が私の嘆きを軽くする。」と私が言うと、7:14 あなたは夢で私をおののかせ、幻によって私をおびえさせます。7:15 それで私のたましいは、むしろ窒息を選び、私の骨よりも死を選びます。7:16 私はいのちをいといいます。私はいつまでも生きたくありません。私にかまわないでください。私の日々はむなしいものです。

ヨブは、死を望んでもそれは来ず、むしろ痛みによって神のことを考えざるを得ない状況を言い表しています。意味もなく生きている状態がなんと酷いことかを言い表しています。自分があたかも、海の巨獣のように神のみが制することのできる存在としてみなされているのか？そこまで自分は悪いことをしているかのように、監視さえているのか？ということでもあります。そして、痛みの中にあっても、もう体力的に疲れ果て眠りについたと思ったら、なんと悪い夢を見てそこでおののかせます。ですから、彼は死を求めました。

7:17 人とは何者なのでしょう。あなたがこれを尊び、これに御心を留められるとは。7:18 また、朝ごとにこれを訪れ、そのつどこれをためられるとは。7:19 いつまで、あなたは私から目をそらされないのですか。つばをのみこむ間も、私を捨てておられないのですか。7:20 私が罪を犯したといっても、人を見張るあなたに、私は何ができましょう。なぜ、私をあなたの的とされるのですか。私が重荷を負わなければならないのですか。

17 節の言葉は、ダビデが後に詩篇八篇で使う言葉であります。「あなたの指のわざである天を見、あなたが整えられた月や星を見ますのに、人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。(詩篇 8:3-4)」この宇宙万象の中で人間はこんなにもちっぽけなはずなのに、神は顧みてくださって、心に留めてくださるという内容であります。

しかし、ここではヨブは皮肉をもって使っています。一瞬も離れることのない痛みの中で、神は自分に心を留めておられる、と言っています。その痛みこそが、神が自分から目を離さず、見張っていることを示している、ということです。ここに、私はヨブの、神の主権についての深い確信を見ます。これだけ苦しめば、「神は不在ではないか」というのが大抵の反応です。こんなひどいことをするのが神だというならそんな神はいない、という結論に至るのです。しかしヨブは、こんなひどいことが起こるのは、私を見張っているからに他ならないと言っています。彼は神に愚痴をこぼしていますが、神が生きておられることを知っているからこぼしているのです。神はおられるのです。

ここに、痛みの意味があります。苦しみというのは、神がすぐにごにおられることを示す、大きな徴です。痛みの中で、神は大声をあげておられます。「わたしは、ここにいるのだよ。」と声を上げておられます。そして、これは只事ではない苦しきは、神がそこにむしろおられるという証拠にさえなっています。

7:21 どうして、あなたは私のそむきの罪を赦さず、私の不義を除かれないのですか。今、私はちりの中に横たわります。あなたが私を捜されても、私はもうおりません。

これも皮肉を込めて話しています。自分の罪や不義は、もちろんヨブの中にあることは本人が知っていました。けれども、そのわずかな罪や不義でここまでの仕打ちを受けていたとするならば、なぜ赦してくださらないのか、という呻きであります。そして、ここで横たわる、すなわち死に着きまず、ということをお話しています。

ヨブは、ずっと不公平であるという訴えをしています。自分のしたことについて、あまりにも倍率の高い拡大鏡を使って神は私を、苦しみをもって責め立てていると訴えています。ここでヨブは、小さい規模ながらも、後に来られるキリストを体験しているのです。キリストこそ、最も不公平な仕打ちを受けられました。何ら罪を犯していないのに、父なる神の怒りの眼差しの中にさらされました。罪

を持っておられないのに、父なる神はご自分の子をまるで罪を犯した重罪人であるかごとく、見張っておられたのです。

したがって、ヨブのようなあまりにも苛酷な痛みをもってしても、キリストの痛みはその先を進んでいました。同じように私たちの痛みもキリストが先を進んでおられます。つまり、その痛みをご自分の痛みによって背負っておられるということです。そして、「わたしもあなたとそこにいる」と確証を与えておられます。

ヨブは、「むなしい日々を過ごしている」と言いました。そして、ただ自分は陰府に下るだけだと言いました。ここはキリストと違いました。彼は自分の痛みについて希望が持てなかったのですが、キリストは違いました。「キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました。(ヘブル 5:7)」この死からの救いとは、十字架刑に処せられない救いではありません。死んでもよみがえるという救いです。ですから、死んで、葬られるのです。ですから、キリストは究極の不条理を味わっておられたのですが、希望をもっておられました。ご自身がよみがえるという希望を持っておられたので、「なぜ」という疑問を本質的には克服しておられたのです。私たちも復活の希望によって、今受けている痛みに対して、「なぜ」という問いが消えていきます。